

教育長 様

校番 5 呉宮原 高等学校長  
( 全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る  
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校  
令和4年度 実施報告書**

## 1 学校の教育目標等

## (1) 教育目標

校訓「自主・自律」

明るく伸びやかな校風のもと、学力、人間性、健康・体力の「知・徳・体」をバランスよく育むことにより、人生を自分自身で切り拓き、他者や社会に貢献できる人材を育成する。

この教育目標は、令和2年度に、学校経営計画における本校の教育目標、育てたい生徒像、アドミッションポリシー等を再設定するにあたって、全教職員から「宮高生の強み・弱み」「育てたい生徒像及びその育成のために目指す資質・能力」「具体的な取組案」を集約し、これに基づく教職員研修の後、全体での協議の結果、学校長が定めたものである。これを令和3年度当初から教職員全体で共有し、生徒、保護者、中学校等に発信するとともに、学校運営協議会での承認の下、中・長期計画として取り組むこととした。令和4年度は、教育活動の核になる部分を年度ごとに変えるべきではないという考えから教育目標等は踏襲することとし、取組の充実・改善に力点を置いた。

## (2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

- 自律 ◆ 様々な意見や情報を踏まえて、自分の力で考え適切に判断し行動することができる生徒
- 挑戦 ◆ 高い目標に果敢に挑戦し、粘り強く努力を続けることができる生徒
- 貢献 ◆ 他者を思いやり協力して行動することにより、仲間や学校・地域に貢献することができる生徒

この「育てたい生徒像」等についても、マスタールーブリックを作成し、シラバス、単元指導計画等に反映して系統的に取り組み始めた矢先に変更することは、デメリットの方が大きいという判断から、教職員の思いを反映させた令和3年度のを継承することとし、令和4年度はその浸透と深まりに力を注いだ。

この「育てたい生徒像」の実現のために身に付けさせたい資質・能力としては、「自律性」「社会性」「探究する力」の3つの側面を重視しており、それぞれの資質・能力を要素分解して、各教科、教育活動等の特性を生かしやすいようにしている。

## (3) 学科等の特色

普通科の特色化が求められる一方、地域からはこれまでどおりの学力向上、進学実績、文武両道などが求められ、経営資産配分の重点化が困難な状況が続くなか、VUCAの時代を生き抜く力を付けることが変貌する大学入試や就業にもつながり、ひいては地域から期待される人材育成にも応えうると考えている。令和4年度も学校運営協議会、呉宮原同窓会等の協力と支援の下、呉宮原高校版「学びの変革」(学習者基点の授業づくり、呉市をフィールドとした「屋根のない学び舎」プロジェクトによる探究活動、ICT機器を生徒が有効に活用した学び、「地域の中の宮高」プロジェクトによる地域貢献活動、国際交流)を推進し、キャリア教育の充実による生徒の進路実現と社会に貢献する人材育成に取り組む学校を目指した。

## 2 研究の概要

## (1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

- ア **呉から社会・世界へ** 地元「呉」を題材に身近な事象に興味・関心を持ち、疑問を丹念に掘り下げる活動により、最終的に、視点を地域社会や自己の進路選択へと向けていく流れを完成する。
- イ **大人・地域との繋がり** 学校の強みを活かし、呉市役所・地元ゆかりの大人・同窓生といつでも繋がれるネットワークづくりやフィールドワークにより、地域への関心を高め、地域の中の自分を意識する機会を持つ。
- ウ **校内での有機的な関わり合い** 生徒・教員が学年・教科・分掌などを越えて繋がる場面を工夫し、教科横断的な試みをはじめ、個々の学びが繋がることを実感できる仕組みを教科サイドから作る。
- エ **将来に応用できる探究スキル** 探究活動の経験が“将来役立つもの”となることを目指し、必要に応じた「適切な情

報収集・「情報の整理・分析・まとめ」・「効果的な発表・伝達」・「アイデアの実践」を実行できる力を育成する。  
オ 生徒・教員共に楽しみ、深まる探究活動 教員が担当教科の日々の授業で教科の特質を活かした「本質的な問い」を  
問い続けることで生徒の好奇心を育み、探究心を鍛え、充実した「総合的な探究の時間」の土台を作る。

## (2) 2年後の目指す学校の姿 (昨年度の提出内容)

- ア 3年間の探究活動の段階ごとの「ねらい」「具体的活動」「評価の観点」を学校全体で共有できている。
- イ 探究活動のプロセスは誰でも取り組み、状況に応じて常に修正・変更できるゆとりがあり、持続可能なものである。
- ウ 「総合的な探究の時間」以外の教科や学校活動においても、探究的な見方・考え方が活かされている。
- エ 「総合的な探究の時間」をきっかけに、生徒や教員が学年・教科・分掌を越えて有機的に関わり合える仕組みがある。
- オ 「総合的な探究の時間」の活動にある程度の自由度が保たれ、生徒や教員が興味や強みを活かして楽しめる。
- カ 探究委員が中心となり、生徒が主体的に探究活動を進められる場面が意図的に設定されている。
- キ 探究活動を深めるため、中間発表や外部機関の方の訪問など、気づきを得られる場が複数回設けられている。
- ク 「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、生徒や教員が地域・卒業生・保護者と繋がるネットワークがある。
- ケ 生徒の探究活動が、提案型から実践型へ向かうチャンスがあり、アイデアを形にする生徒が生まれている。

## (3) 令和4年度の目標 (昨年度の提出内容)

### ア アウトプット (活動指標)

- 探究プロセスは、誰にでも取り組めるもので、学年会などの意見を取り入れ、修正しながら進める持続可能なものである。
- 活動にはある程度の自由度があり、生徒や教員が個々の興味や強みを活かして楽しめるものである。
- 探究活動の成果に深まりを持たせるため、中間発表や、外部機関の方の訪問が年間に複数回ある。
- 探究活動で、提案型から実践型へ向かうチャンスがあり、アイデアを形にする生徒が生まれている。
- 「総合的な探究の時間」と各教科・科目との関連を示すカリキュラム・マップ (試行版) ができ上がっている。

### イ アウトカム (成果目標)

アンケートチェック項目は前年度と同様である。(前年度の結果から、本校の探究活動に分析・吟味・改善を加え、以下のような項目の数値の向上を目指す。)

- 総合的な探究の時間で行う探究学習に積極的に取り組んでいる。
- 授業において、自分たちで考えたり考えたことを表現したりする場面がある。
- 探究活動を通して(「総合的な探究の時間」だけでなく)自分の学力や技能が向上したと実感する。
- 本校では総合的な探究の時間以外でも、探究的な視点を大切にしていると感じる。
- 探究活動において、今後役に立つ力が身に付いていると感じる。

## (4) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

### ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」において、各学年とも次の名称で実施している。

(1学年：宮高サーチ，2学年：宮高ゼミⅠ，3学年：宮高ゼミⅡ)

### イ カリキュラム開発の概要

「屋根のない学び舎」プロジェクトの充実に向けての取組をさらに進めた。地域の大人や活動と繋がることを通して、気づきを得て、将来的に地域を大切に思い、身近な問題を自分ごととし、自分にできる何かを実践しようとすることを目指したカリキュラム開発の過程である。日常的な各教科の学びから身に付けた資質・能力を応用し、「地域と自己の興味・関心に関連付けて課題発見・解決」をする経験を通し、一人一人の進路実現やその先にも活かしてほしい。

(マクロレベル) 令和4年度は、昨年度からの重点課題である「探究活動の深まり」の実現に向け、主に2つのことに焦点を当てた。1つは「探究活動の仕組みの修正」、もう1つは「各教科の授業でのアプローチ」である。昨年度の全体研修では「探究活動の深まりには、各教科の協力が不可欠である」という結論を得た。研究指定校第1回運営委員会でも、合同授業研究会に向けて『教科』での取組を強化するよう要請があり、指導主事に伴走していただく教科として英語を設定して取り組んだ。プロダクトデザインをテーマにした英語の研究授業内容は、同学年を担当する外国語科の全教員で共有することを前提として議論を進め、技能が重視されがちな外国語科でいかに探究的な視点を取り入れられるか模索した。例年実施する11月の公開研究授業に向けては英語に加えて国語・数学を加えた3教科を「探究的な視点を工夫した授業

づくり」の研究対象とし、各教科における探究的視点とは何であるか、3教科に共通する見方・考え方の観点は持てるのか、などを教育研究部主催によるミーティングで確認しつつ取組を進めた。

(マイクロレベル) 以下の課題のうち、主として今年度の取組に最も深く関連する課題1について具体的取内容を述べる。

課題1の解決に向けた取組は、その他の課題の解決にも間接的につながっていくものである。

課題1 探究活動をもっと深めたい。

課題2 提案だけでなく実践へとチャレンジさせたい。

課題3 呉市内外で活躍する同窓生のネットワークを広げたい。

課題4 3年間の「総合的な探究の時間」で、クラス・学年・教科・分掌を越えて有機的に関わる仕組みを作りたい。

課題5 コロナ禍でフィールドワークが困難でも人と繋がらせたい。

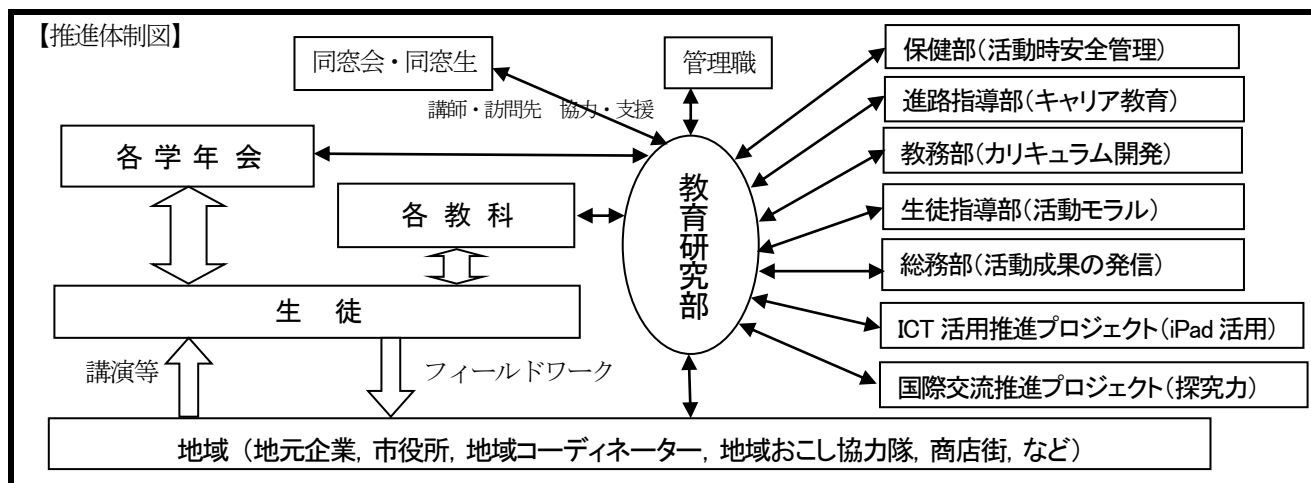
課題6 生徒の探究活動の歩みを残し、後輩が先輩の探究に学び、継続探究できるようにしたい。

課題1「探究活動の深まり」については、公開研究授業に向けて「各教科における探究的な視点に立った授業づくりの工夫・改善」という共通テーマを設定し、国語・数学・英語の三教科で取組を進めた。結果としては、「探究的な視点」の捉えは曖昧なままとなり、研究内容は「探究的な手法」を取り入れた授業実践の紹介にとどまった。何をもって「探究的視点」とするのか最後まで各教科で迷走したのが実態である。その様子を見かねた校長より、そもそも「探究」とは何なのかを考え直すための文書（「丹Q請」＝探究考）が校内掲示板に提示され、「探究とは」「総合的な探究の時間とは」の原点に立ち戻る機会を得た。文書では、高等学校学習指導要領を引用しながら分かりやすく解説され、読み進める教員に問いを投げかけるものであった。「探究」はあくまで「知識・技能」の活用力を高め、「思考・判断・表現」の資質・技能を定着させ、将来にわたって学び続けるための方法の一つであること。決して難しく考えることはなく、「探究」することを目的としてはならないこと。その一方で、各教科担当である個々の教員が日々生徒に投げかける「本質的な問いづくり」について見直すことを厳しく問うものであった。それは『高等学校学習指導要領第1章総則第3款 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善』の求める内容と同義である。探究活動の深まりのためには、「総合的な探究の時間」お任せではなく、全教職員が各教科の特性を生かし、生徒への「問い」を研ぎ究め、好奇心・興味・関心を刺激し、探究の素地を育む必要がある。

以上のことから、本校の研究指定校としての取組は、「総合的な探究の時間の仕組みづくり」と共に、「日々の授業の問いづくり」に焦点を当てることとなった。探究に特化した研修よりも、日常的に誰もがができる取組の研修へシフトした結果が、第2回授業づくり研修（8月）、第3回授業づくり研修（1月）である。特に後者においては、実際の大学入試問題を利用し、現在の生徒たち求められる力を把握すると共に、教員が多様な入試に対応できる生徒を育てるための“小さくても根本的な変化の起こし方”について研修した。

#### ウ 校内体制

○カリキュラムの開発過程における全教員の参画に向けては、教育研究部での協議内容を校務運営会議・教科主任会議において確実に情報共有し、ともに改善案を出し合うスタイルとする。



○外部の様々なイベントへの参加募集を校務運営会議・教科主任会議で紹介し、効果的な分掌や教科から生徒へ提示してチャレンジを応援する学校文化にすると共に、生徒情報の共有により個々の生徒が力を発揮できる場を積極的に用意する。

- 「屋根のない学び舎」プロジェクトの充実のために、探究活動のための人材ネットワークを更に広げていきたい。新たな試みとしては、学校運営協議会と連携し、幅広い分野で活躍される方々との接点を増やす予定である。
- フィールドワークの連携の際は、教育研究部だけでなく学年団全体で動く体制をとり、原則として全担当教員は生徒の訪問先を手分けして訪問し、お礼をすると同時に様子を伺う。御協力いただく地域の声を真摯に受け止め、トラブルは確実に共有して次回の改善に向けることは、地域探究の取組において欠かせない。また、教員が生徒と共に地域に出向き、地域と繋がり、新たな気付きを得ようとする姿勢を大切にしたい。今年度は小さなトラブルをきっかけに全教員によるフィールドワーク先訪問を実施したが、それにより地域から生徒に関する好意的な御意見をいただいたり、活躍の場を提供していただくなど収穫が多かった。

#### (5) 学習評価

- 生徒の探究活動の各段階（課題テーマ設定・情報収集・整理とまとめ・発表）ごとに、基本的なポイントについて、自己評価・相互評価を行った。教員は一連の探究活動において、生徒の状況を看取りながら指導・助言を与え、探究の深まりを支援した。この際、生徒が複数の教員の意見をもらうステップを必須とした。探究の段階ごとの評価基準としては、新たなルーブリックを作成するよりも、現行のマスタールーブリックを生徒・教員で活用していく方向を教育研究部内で確認した。具体的な活用は来年度からとする。年度末は例年どおり文章による3段階の評価を行った。また、生徒自身が自己の探究活動を振り返ってアンケートに記述した内容から、探究活動の経験による生徒の思考の変容を見取り、教員団で共有することで、次のレベルへ向かう方策を議論していく。また、生徒同士が互いの振り返りを共有できる機会も設けた。
- 昨年度に続き1・2学年で思考力テスト（GPS-Academic）を実施した。現2年生の昨年度の結果との比較より、「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」のいずれにも成長が見られる。これは学習者基点の授業づくりを進める取組が実現し始めているということではないかと考える。また、創作的な活動へのチャレンジを教科をまたいで取り組ませるなど、生徒たちの好奇心を刺激し、隠れた能力を発見させ、自ら動きだす生徒を育てる機運が高まっていることも背景にあるのではないかと考える。GPSテストの結果については、本校の全体的な教育活動における結果としての思考力の深まりを見るための参考データと捉えている。「総合的な探究の時間」に係わる生徒の資質・能力の高まりを測る物差しの1つとする方向性は今年度も同様である。

#### (6) カリキュラム評価

- 今年度は、例年実施している学校評価アンケート・授業評価アンケートとは別に、総合的な探究の時間に焦点をあてたアンケートを生徒・教員を対象に試行的に実施した。この結果は、現在変更・修正を検討している来年度のカリキュラムにも大いに参考にすべき点があり、学校全体ならびに保護者にも共有して今後の取組みに御協力いただきたいと考える。

昨年度の報告書では、「今後の改善点」を考える中心に教育研究部が頻繁に登場している。例えば、「教育研究部内で共有・吟味し、どの方法で修正を加えていくか検討する」という表現であるが、課題解決（＝探究活動の改善）の主体を、教育研究部が担うという思考から脱却し、部から離れた所へ預け、学校全体の動きとなるよう促進することを今後の方向性としていきたい。既に外部のイベント参加への呼びかけが教科（国語科）から発信されており、そこに教科横断で家庭科の授業も参加するなど、教科の得意を活かし、学校を巻き込んでチャレンジを楽しむ試みが始まっている。

### 3 令和4年度の成果及び課題

#### (1) 成果

- 「総合的な探究の時間」の担当教員に対する記述式のアンケートでは、①ポスター成果発表会に至るまでの探究活動状況の看取りと、②自分自身が主体的に「総合的な探究の時間」をデザインする場合の願望をたずねた。生徒の探究状況は、過去との比較において確実に進化（仮説・検証・提案を含むなど）しているものの、テーマが地域に限られることの賛否が述べられていた。地域を扱うことは当初から議論があるが、呉市は日本の縮図と言われるように、その地域課題のみならず、歴史・人物・活動の面でも、ぜひとも高校生の時期に触れさせたい題材に溢れている。ただし、来年度からは「呉地域」に焦点を当てるのは、興味・関心を持たせたい1学年とし、主体性が重視される2学年の探究活動は、純粹に自分の興味・関心に重点を置いたものとする。また、担当教員の役割も主体性を重視し、探究の手法をまとめたテキストを適宜利用し、希望分野に分かれた生徒グループと共に探究するスタイルへ変更する。

○2学年生徒への探究活動の振り返りアンケートでは、全ての回答に具体的な記述を求めた。肯定的な意見、否定的な意見の両方から、生徒の思考の深まりが感じられる。グループでの協働が基本のため、自分が本当に取り組みたいテーマができなかった生徒が多い実態があったが、探究を進める中での発見や意外性に面白みを見出した生徒がむしろ多い。84.7%の生徒が「意欲的に宮高ゼミの探究活動に取り組んだ」の項目に「はい」と答え、74.3%の生徒が「宮高ゼミの活動は今後役に立ちそうか」の項目に「はい」と答えている。また、特徴的なのは、その答えに対する根拠の記述が具体的・客観的である点である。ただ、厳密に結果を捉えると、「生徒自身の満足度」と「教員の看取りによる生徒の探究活動への満足度」にはギャップがある。それは「探究の深まり」に対する評価の差である。ここを埋められるのは、週一時間の探究活動ではなく、日々の教科の授業での下支えである。研究指定校としての今年度の大きな収穫は、授業での『本質的な問い』で生徒を日常的に鍛え、好奇心を刺激しておくことが、深まる探究活動の素地をつくることを全体共有できたことである。一方、特筆すべきなのは、「より良い『宮高ゼミ』のための提案をしてみてください」の項目に対する生徒の記述が非常に意欲的で具体的なことだ。後輩視点でよりよい探究活動のための提案ができることを評価したい。また、その提案内容は教員からの回答と共通するものが多い。

○「本校は「総合的な探究の時間」での探究学習に積極的に取り組んでいる」の項目について、保護者の「そう思う」の回答が昨年度の34%（190人）から、今年度20%（117人）に下がった。回答数の減少（54人減）もあるが、学校での探究活動を家庭でも御理解いただき、話題となることで、生徒が探究のヒントを得る機会は少なくない。実際、地域の3校で実施している三校合同発表会に出場した代表チームの生徒は、地域探究への保護者の関心の高さも感じさせた。地域をテーマにする本校において保護者を巻き込んで応援いただくことは力強いことである。

○その他、今年度の取組の成果として「呉市・地域コーディネーターなどの助言者との日常的な交流の開始」「各学年の探究成果のデジタルデータでのアーカイブ化」「総合的な探究の時間」と地歴・公民の連携による探究活動の強化」「教員が取り組ませたい探究テーマ紹介」「呉市との共同による呉市内高校アンケート実施」「1学年での個人呉探究発表」「2年次探究の複数教員との交流」などがある。

## (2) 課題

昨年度の反省から、「総合的な探究の時間」に係わるアンケートを年度末に記述式で実施し、数値では判断しにくい点を明確にできた。

また「総合的な探究の時間」のための「総合的な探究の時間」とならぬよう、生徒が実生活との関連性を実感しているかも質問に加えた。

今年度の授業評価アンケートで、「総合的な探究の時間」と関連する項目は以下の3つである。数値は昨年度から今年度への変化である。

設問 授業では、知ることや考えることが楽しいと感じることがある。【48.3%→48.2%】

設問 授業では、授業で学んだことを自分の生活や社会と関連付けて考える場面がある。【41.9%→43.8%】

設問 授業において、難しい問いや課題に対しても諦めず取り組んでいる。【33.8%→37.0%】

「好奇心」「深い学び」「チャレンジ精神」に関連するこれらの項目の数値はいずれも50%を下回っている。これらはいずれも探究活動の原動力となるものである。これらの力を育てる場となるのが各教科の日々の授業であり、その中で生徒に与えられる「本質的な問い」であることの共通認識は、本校の飛躍のチャンスであると捉える。全教職員が日々の授業で実践できる取組の中に、『探究活動を深めたい』という本校が直面する「総合的な探究の時間」の課題解決の糸口があった。

## 4 令和5年度の目標及び取組内容

### (1) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

■育てたい生徒像の実現に向けて、3年間の「総合的な探究の時間」の「ねらい」が学校全体で共有できている。

（現行のマスターループリックを生徒・教員間で活用する場面を工夫する）

■外部コンテストなどへの挑戦を教科サイドから推進するなど、学校全体で生徒の興味を発見・共有し、育てる。

■「総合的な探究の時間」の探究活動が、日々の各教科の「本質的な問い」で鍛えられた生徒の成果発表の場となっている。

（教科はその特性・強みを活かし、生徒の見方・考え方をゆさぶり、好奇心・探究心を育む。）

■「総合的な探究の時間」のスタイルに自由度があり、生徒や教員が興味や強みを活かし、主体的に動けるものである。

■ 「屋根のない学び舎」プロジェクトが起動し、地域・人々・活動と双方向に繋がり、地元の探究をきっかけに、その後も役立つ探究の素地が育まれている。

#### イ アウトカム（成果目標）

令和5年度のアウトプット（活動指標）の成果については、アンケートの際に各項目についての数値だけでなく、独自の記述式アンケートにより、生徒・教員・保護者の声を具体的に聞き、丁寧に検証することが有効である。数値では、各項目において肯定的な意見が7割以上になることを目標値としたい。また、記述の回答においては、各教科の働きかけによる生徒の探究内容の変容や、外部コンテスト等への挑戦事例が生まれていることを目標とする。

### (2) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

#### ア カリキュラム開発の概要

令和5年度は「総合的な探究の時間」の仕組みの改善と「教科の役目の明確化」を主な柱とし、生徒の探究活動の深まりを目指す。

- 地元「呉」を知り、探究する活動は1学年に限定し、2学年の探究テーマは興味に基づく自由テーマとする。
- グループの協働による探究スタイルは絶対条件とせず、個人からのスタートや途中からの協働も可能とする。
- 2学年はクラスの枠を越えた分野別グループに属し、担当教員が主体性を活かして共に探究できるスタイルとする。
- 各教科の授業で生徒を鍛えた成果発表の場が「総合的な探究の時間」であると捉え、教科は日々「本質的な問い」を問い続ける。
- 探究活動が深まるために育てたい資質・能力として、日常的に各教科がどの部分を担えるのか明確にする。
- 外部コンテストなどへの挑戦を各教科から呼びかけ、生徒が経験を積んで自信に繋げる機会を積極的に提供する。

#### イ 校内体制

「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発に関しては、p.3の【推進体制図】のとおり、教育研究部が校内における情報共有・活動推進の役目を担う。ただし、指定校3年目となる今年度は、他の分掌、教科、学年団も同様の役目を担うことができるという視点に立ち、校務運営会議や教科主任会議で十分に情報共有をしながら、必要に応じて地域連携の窓口も分担するなどし、それぞれの強みを活かすと共に、時には共同して取り組む。以下は令和4年度の状態を考慮した上での令和5年度の留意点である。

- 4月当初に転入者も含めて本校の3年間の「総合的な探究の時間」の流れを全体共有する。1学年「宮高サーチ」、2学年「宮高ゼミⅠ」、3学年「宮高ゼミⅡ」のねらいや進捗状況は適宜校内で情報共有し、学年を横断した探究活動の実現に繋げる。
- 「総合的な探究の時間」の指導計画は、学期毎のねらいや到達目標を提示するが、より自由度を高め、担当教員の主体性を活かして生徒と共に探究を進めるスタイルへ変更する。（※その際、現状報告・軌道修正・問題解決の場として学年会を重視する。）
- 日々の各教科の授業で生徒の探究力の土台を作ることを前提とし、その成果発表としての「総合的な探究の時間」とする。